天理市埋蔵文化財調査概報

（平成13年度・国庫補助事業）

平等坊・岩室遺跡（第21次）

2002

天理市教育委員会

例　言

1．本書は、天理市教育委員会が平成13年度国庫補助事業として実施した平等坊・岩室遺跡における発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、天理市教育委員会生涯学習課文化財係が実施し、技術吏員青木勘時が現地調査を担当した。また、発掘調査前の予備調査については天理大学考古学研究室（置田雅昭教授）に御協力いただき同研究室学生諸氏の助力を得た。

3．本書収録の調査地および発掘調査の期間は以下の通りである。

平等坊・岩室遺跡　調査地：天理市平等坊町204番地

調査期間：平成14年１月８日～３月29日

4．現地調査から遺物整理作業および本書作成に至るまでに下記の方々の助力を得た。記して謝意を表する。

江角啓(大阪市立大学大学院)、古田陽・岡本麻依子(天理大学学生)、

元木和歌子(天理大学卒業生)、芳村信芳、中森富美代、藤岡早希

5．現地調査および出土遺物について、下記の方々から有益な御教示、ご指導を賜った。記して厚く御礼申し上げる次第である（敬称略・順不同)。

置田雅昭(天理大学)、山内紀嗣・高野政昭・太田三喜・日野宏(天理参考館)、

池田保信(埋蔵文化財天理教調査団)、萩原儀征・清水真一(桜井市教育委員会)、

藤田三郎・豆谷和之(田原本町教育委員会)、小池香津江(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館)、

福田さよ子(奈良県立橿原考古学研究所)、鍋島隆宏(太子町教育委員会)、

北野俊明(堺市立埋蔵文化財センター)、穂積裕昌・川崎志乃(三重県埋蔵文化財センター)

6．本概報の執筆および編集は青木勘時がおこなった。なお、Ⅱ－３．予備調査の成果報告については上原敏伸氏（天理大学卒業生・徳島文理大学大学院）より玉稿を賜った。記して御礼申し上げる次第である。

目　次

平等坊・岩室遺跡（第21次）の調査

Ⅰ．はじめに……3

Ⅱ．調査の契機と経過……4

１．調査の契機……4

２．調査の方法と経過……4

３．予備調査の成果報告（上原敏伸）……5

Ⅲ．調査の概要……7

１．層序……7

２．検出遺構……8

３．出土遺物の概観……14

Ⅳ．まとめ……22

平等坊・岩室遺跡（第21次）の調査

Ⅰ．はじめに

平等坊・岩室遺跡は、天理市の中央部に所在する弥生拠点集落である。地理的には奈良盆地東部に位置し、盆地東部山麓の谷筋から派生して市域を西向きに流れる布留川により形成された扇状地下方の沖積平野上に立地している。遺跡の範囲は東西約400m、南北約600mと推定され、これまでに遺跡北半部を中心に実施された20次におよぶ調査の成果により、弥生前期に環濠集落の形態が確立し中・後期にかけての連続的な集落域の拡大とその後の環濠集落の終焉から古墳時代集落への移行に至るまでの集落様相の変遷過程が確認されている。

当遺跡の周辺では東に近接して前栽遺跡が所在し、縄文晩期の突帯文土器や弥生中期の方形周溝墓群の検出例により平等坊・岩室遺跡の弥生集落に深く関わる遺跡であると認識されている。北東には弥生中期の土器や古墳前・中期の玉作り関連遺物の出土した九ノ坪・シマダ遺跡、北に隣接して弥生後期後半～末の小集落を成す平等坊松ノ木遺跡が存在する。また、南方には弥生後期末～古墳前期の合場遺跡や西南方の嘉幡遺跡等の集落遺跡とその周辺に拡散する同時期の遺物散布地の所在が認められており、平等坊・岩室遺跡の環濠集落終焉以後の周辺への集落圏拡大を示す遺跡分布の在り方であると考えられる。ほかにも当遺跡周辺には多くの弥生～古墳時代の各時期に該当する遺物散布地や周知の遺跡の分布が知られるが、調査例も少なく実態の把握できたものの数も少ない状況である。

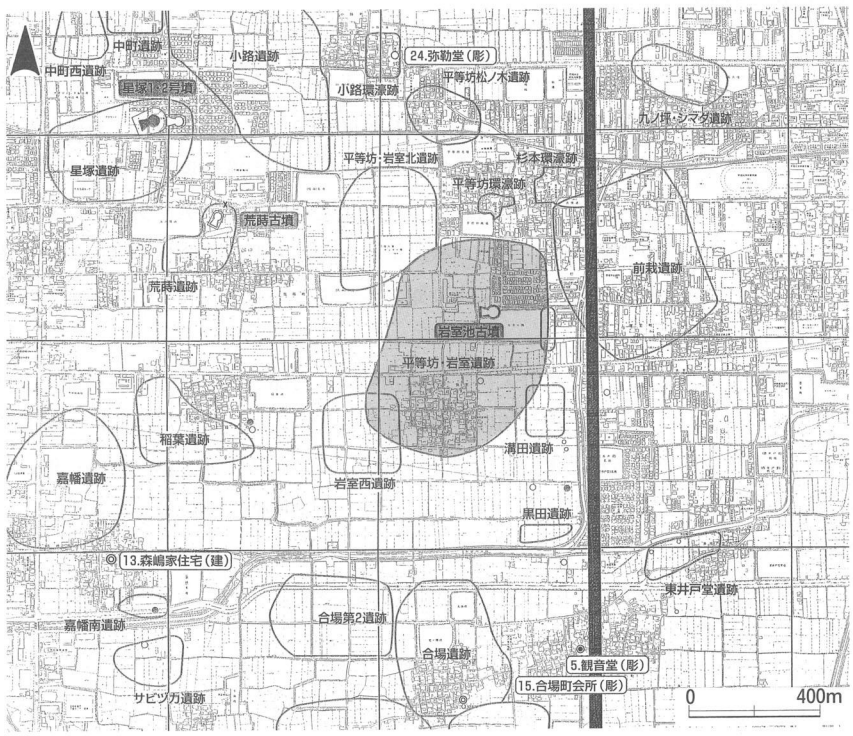


図１　平等坊・岩室遺跡と周辺の遺跡（S=1/20000）

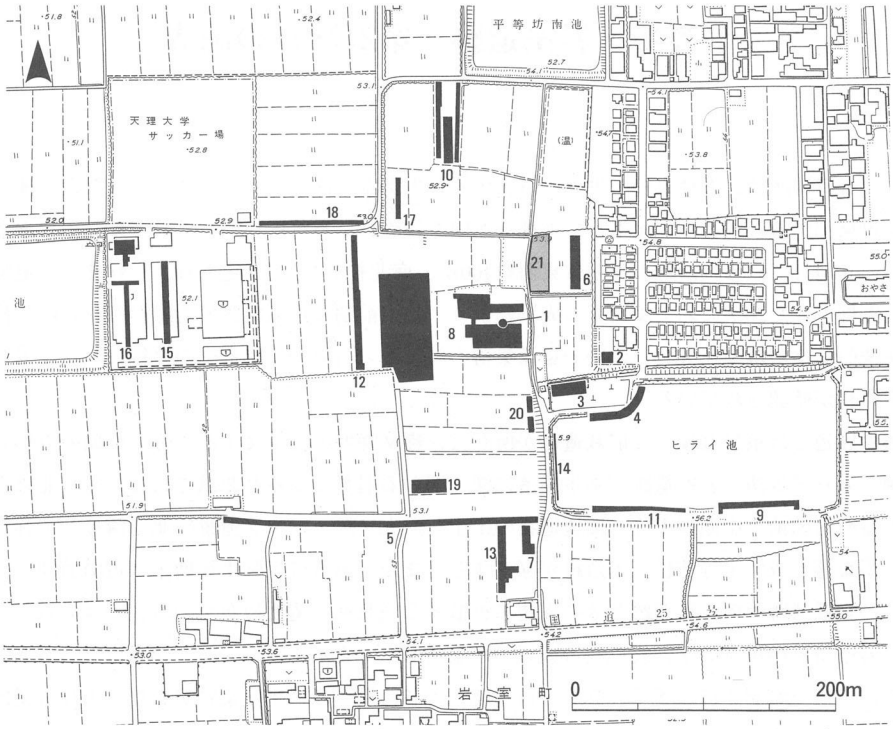


図２　これまでの調査地点（S＝1/5000）

Ⅱ．調査の契機と経過

１．調査の契機

平等坊・岩室遺跡では、平成４・５（1992・1993）年度に実施した大規模マンション建設に伴う第８次調査の際に弥生後期後半～末に出現が想定される方形特定区画の一部分（南西角）を確認しており、これらの遺構の存続期間と環濠集落終焉前後期における集落内部の区画溝や環濠囲郭形態の様相変化が時系列的に把握できた点で大和弥生社会の古墳時代への移行と変革を示す一例、あるいはその縮図として評価できる事例となった。しかしながら、当時の検出位置からは方形区画全体の平面形や正確な規模の把握はされておらず、周辺地形や従前の調査により知り得た環濠配置の在り方から推定される規模と平面形態を提示するに留まっていた。

こうした現状から、正確な規模と形状および付随施設や囲郭内部における建物の有無や埋没過程の異同等の把握すべき諸相についての探求を目的に、現時点の方形区画溝推定位置における範囲確認調査の必要性を考えて実施したものである。また、本調査に当たっては偶然にも方形区画溝を検出した第８次調査地東調査区の北東側に南北里道を挟んで近接した地点に調査可能な休耕田があったため、所有者に発掘調査の意義と趣旨についての説明と調査実施の要望を伝えて交渉を進めたところ、土地所有者である池田昇氏の御厚意によりその旨について御快諾を頂き今次調査に至ったものである。ここに記して御礼申し上げる次第である。

２．調査の方法と経過

調査は南北に長い調査地の東西両側に幅２ｍを基調としたトレンチを設定し目的とする方形区画溝の

位置確認に努めた。当初より西トレンチは29m、東トレンチが39mとそれぞれに南北に長く狭小な調査区を設定し、まず東トレンチから調査を進めた。なお、これら調査区の設定以前に天理大学考古学研究室（置田雅昭教授）の御協力のもと天理大学考古学研究室の学生諸氏の参加により地中レーダー探査および電気探査による遺構の位置確認を目的とした理化学的手法による予備調査を実施している。その成果については次項に記した通りである。

実際の発掘調査については、全て人力による掘削を主として実施し、トレンチによる遺構有無等の確認の後、東トレンチについては遺構の確認できなかった北端から南へ9m分を記録作成後に埋め戻し、残る南側延長部の西側に1m幅分を拡張して面的な調査を遂行した。また、目的とした方形区画溝の南側肩部のみ連続的な側縁の確認のため東西両トレンチを接続させるように最終的には南北幅6m分の拡張もおこなった。こうした作業の過程により総調査面積約186㎡の発掘調査となった。なお、現地における調査は予備調査が平成13年12月20日より24日までの延べ5日間を要し、本調査については平成14年1月8日から開始し3月29日にすべての作業を終了した。

3．予備調査の成果報告

本稿は、平成13年12月20日から同年12月24日までの期間に実施した平等坊・岩室遺跡の遺跡探査の調査報告である。調査の目的は、第8次発掘調査で検出された方形区画の追求と、遺跡探査後に行われる発掘調査に対し、地下の情報を事前に提供することである。調査地は、第8次発掘調査の北東方向、第6次発掘調査の西方にあたる。調査地の形態は南北長約45m、東西長約15mの長方形を呈する。方形区画の推定復元案によれば、調査地のほぼ中央において東西方向に走るかたちで方形区画が確認できそうである。

ここでは、便宜上調査地の南西隅をX＝0m，Y＝0mとし、基準杭を設定した。基準杭より東方向がX軸の正、北方向がY軸の正となる。

調査の手法

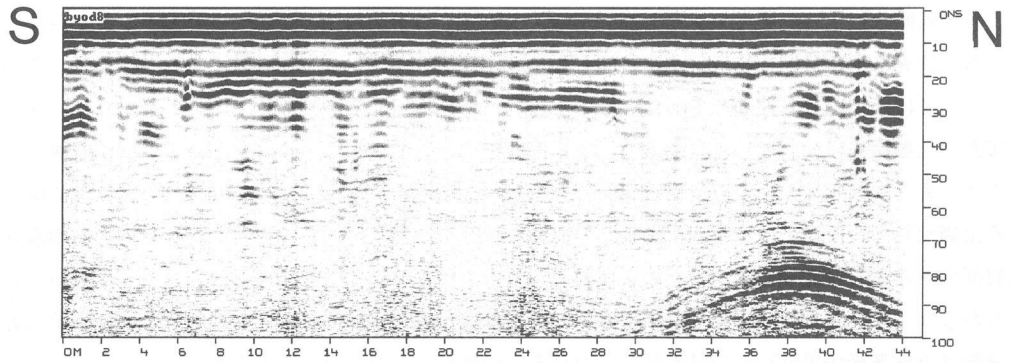
調査ではレーダ探査と電気探査の2種類を採用した。

前者は、地中に電波を放射状に発射し、その反射の速度や強弱により地下の様子を推定する方法である。使用機器は米国G.S.S.I.社製「sir-2」機、アンテナは700MHz及び400MHzの周波数のものである。データ解析にはDean.Goodman氏作成の「Slice」を使用した。700MHzアンテナで南北方向に50cm間隔、400MHzアンテナでは南北方向と東西方向において1m間隔で走査し、それぞれの採集データを平面図化した。後者は、地中へ電流を流し、土壌や「異物」による電気抵抗の差から地中の様子を推定する方法である。使用機器は(株)応用地質社製「Mcohm」、データ解析にはGoldenSoftware社製「Surfer」である。電極棒の配置方法は2極法とウェンナー法を採用し、水平探査（疑似断面図の作成）、平面探査（疑似平面図の作成）をそれぞれの電極棒配置で行った。

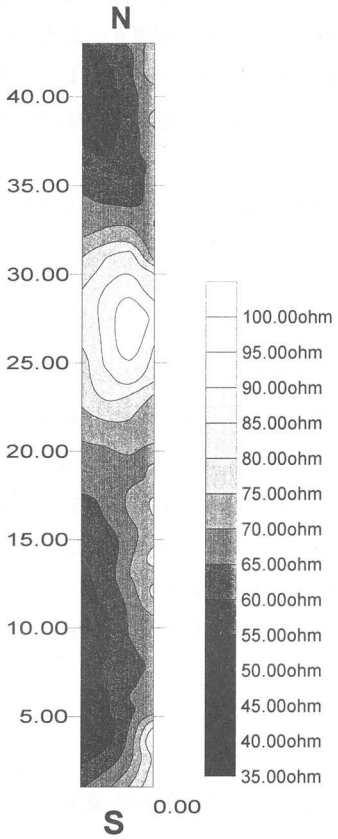
探査の結果

①レーダ探査

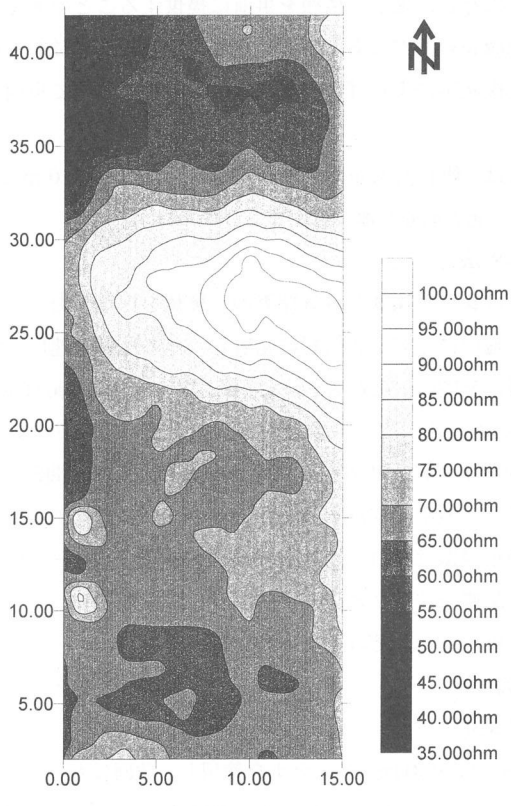
400MHzと700MHzのアンテナを使用し、数回にわたってデータを採集したが、溝状の遺構を示すと考えられる応答を断面図（図1）、平面図ともに、得ることはできなかった。これは調査地が耕作地で水分を多く含んでいるため電波が減衰したことが原因であろう。以上のように、残念ながらレーダ探査で方形区画と思える応答を得ることはできなかった。



1　レーダー探査　断面図　X＝７mライン



2　電気探査　断面図
X＝７mライン（左辺が地表面）



3　電気探査　平面図

図３　遺跡探査の成果

ところで、断面図（図３－１）のＹ＝38ｍ～40ｍの範囲で非常に強い応答が確認できる。これは、応答の強さや深さから、近年に設置された配水管などの施設と考えることができる。なお、レーダ探査の平面図は特筆すべき応答は認められないため、割愛する。

②電気探査

Ｘ＝７ｍラインで南北方向に水平探査を行った結果、およそＹ＝23ｍ～30ｍの範囲で比抵抗値が高いことが確認できる（図３－２）。さらに平面探査においてもＹ＝23ｍ～30ｍの範囲で、若干東にむかって南にふれるかたちで比抵抗値が高いことが確認できる（図３－３）。これらの結果から、Ｙ＝23ｍ～30ｍの範囲の中に溝状の遺構が東西に走るかたちで存在することが想定できる。さて、比抵抗値の高い部分は方形区画の推定位置にあたるため、これが方形区画を示している可能性がある。ところが、第８次発掘調査で検出した方形区画の埋土は粘土質で水分を多く含んでいたらしい。これから考えると方形区画が存在する範囲では比抵抗値が低くなるはずである。そのため、比抵抗値の高い部分に方形区画が存在すると考えるのは若干無理があるように思える。しかし、方形区画の埋土には多くの遺物が混入していることが確認されており、それにより比抵抗値が高くなったとも考えられる。

以上のことから、疑問点はあるもののＹ＝23ｍ～30ｍの範囲の中に方形区画が存在する可能性が極めて高いと言える。（上原敏伸）

Ⅲ．調査の概要

１．層序

当調査地における基本層序は東西両トレンチの土層観察をもとに以下に示した認識により把握することができた。

［基本層序］

第Ⅰ層：褐灰色砂混じり粘質土(旧耕作土)。層厚0.2～0.3ｍで調査地全域に拡がる近年までの耕作土である。

第Ⅱ層：灰黄褐色微砂・細砂混じり砂質土（床土)。層厚0.2～0.3ｍ。耕作土直下の水田床土相当層。

第Ⅲ層：暗褐灰～にぶい黄褐色砂混じり粘質土(遺物包含層１)。現地表下約0.5ｍ前後の深さに遺存する。

第Ⅳ層：淡褐色微砂・粗砂混じり砂質土(遺物包含層２)。現地表下約0.7ｍ前後までに遺存し弥生前期～中世の遺物を多く含む。層厚約0.1～0.3ｍで調査地北側では堆積が薄く遺物量も少なくなっている。

第Ⅴ層：灰黄褐～にぶい褐色砂質土～粗砂・細砂・細砂混じり粘質土（弥生前期自然河道埋土）

第Ⅵ層：灰黄色シルト混じり粘質土（地山）

第Ⅶ層：緑青灰色粘質土～粘土（地山）

第Ⅰ・Ⅱ層の近現代の耕作に伴う堆積土層以下では第Ⅲ・Ⅳ層の中近世以降の耕作による攪乱堆積で形成された上下２層に大別可能な遺物包含層が認められ、下面に存在した弥生～古墳・古代に至る遺構面を著しく削平したものと考えられる。特に調査区北半以北では北方に向かい弥生集落の縁辺で遺構が疎少であることも加えて下位の第Ⅵ層上面で条里地割内部の耕作溝痕跡が残る状況にあり、調査区中央に浅く残る弥生中期大溝検出位置を境に急激に遺構密度が低くなっていた。逆に、これより南方では第Ⅳ層の層厚が増しレンズ状に落ち込む状況から直下に平安期以降の中世土器片を多く包含する落ち込み

SX01やこの遺構に先行する弥生中・後期～古墳前期の溝状遺構群を検出しており調査区南端付近における南肩相当の下位堆積層の起伏が認められる地点にまでの窪みや掘り込みが連続していた。

前述した要因により、主要な遺構群は調査地北側の大半が第Ⅵ層上面より検出、確認されたものであり、南端付近の遺構群の肩部付近にのみ第Ⅴ層の弥生前期土器の混じる砂礫土～粘質土上面が検出面となっていた。なお、第Ⅶ層の地山相当層はその下部にある無遺物層であるが、土壌の様相から扇状低地部における沖積層であることが窺える。

図５では東トレンチ西壁土層断面および東西両調査区連結部南壁土層断面の堆積状況を示し、遺構検出面以下に見られる各遺構間の重複関係等の状況を明示したものである。図４の調査区平面図に見えるように調査区南半以南では弥生中期～中世前半期の溝状遺構や落ち込みの重複が著しく、現地調査では平面的な遺構の認識を困難にする状況を呈していた。

各調査区相互の土層観察により各遺構間の平面的な位置付けと前後関係を考慮することができたが、各遺構の存続期間については調査後の遺物整理作業を待って判断せざるを得ない状態であったために後述の遺構、遺物の概観では遺構帰属時期の前後期遺物混入のあるままに解釈したものもある点をここで断っておきたい。

２．検出遺構

今回の調査地では第Ⅳ層および第Ⅴ・Ⅵ層の上面で遺構群の検出が認められた。第Ⅳ層上面では条里地割に沿った素掘り小溝群が調査地全面に拡がり、これより上位の土地利用がほぼ耕作に伴うものと判断することができた。そして下面の第Ⅳ層に包含される土器等の遺物の下限時期が中世後期から近世以前に帰属することからも、概ね近世以降の耕地としての継続性がわかる。次に下位の第Ⅴ・Ⅵ層上面でも調査地のほぼ中央で条里地割に沿う素堀り小溝群が認められたが、これらが当調査地における耕作痕跡の初現となり以下に述べる弥生～古墳時代遺構群を著しく削平した要因であると言える。現時点ではその時期がいつまで遡るのか明言できる材料を欠くが、上部の遺物包含層中の土器・瓦類等の遺存から概ね平安期前半以降の中世前期の時期幅に収まる頃と考えておきたい。

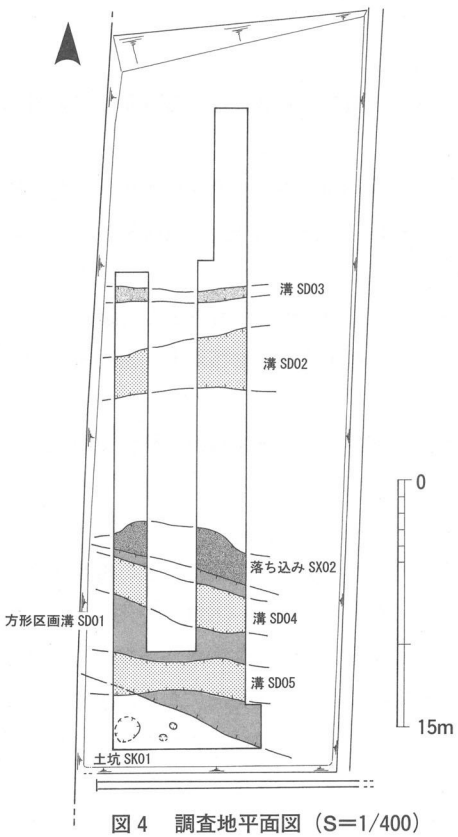


図４　調査地平面図（S=1/400）

以下、第Ⅴ・Ⅵ層上面で検出された各遺構の概観を記しておく。

溝状落ち込みSX01

調査区南端付近に存在した東西方向の溝状の落ち込みである。調査地壁面の土層観察から南北幅約6.0～7.5m、深さは0.5m前後を測る。埋土は上半が灰黄褐粗砂混じり粘質土、下半から底面直上では褐灰～黒褐色粘土となっており、それぞれに中世土器類を主体とした遺物の出土が見られた。なお、完形品を含む土器類のほとんどは埋土下半の粘土層より出土している。

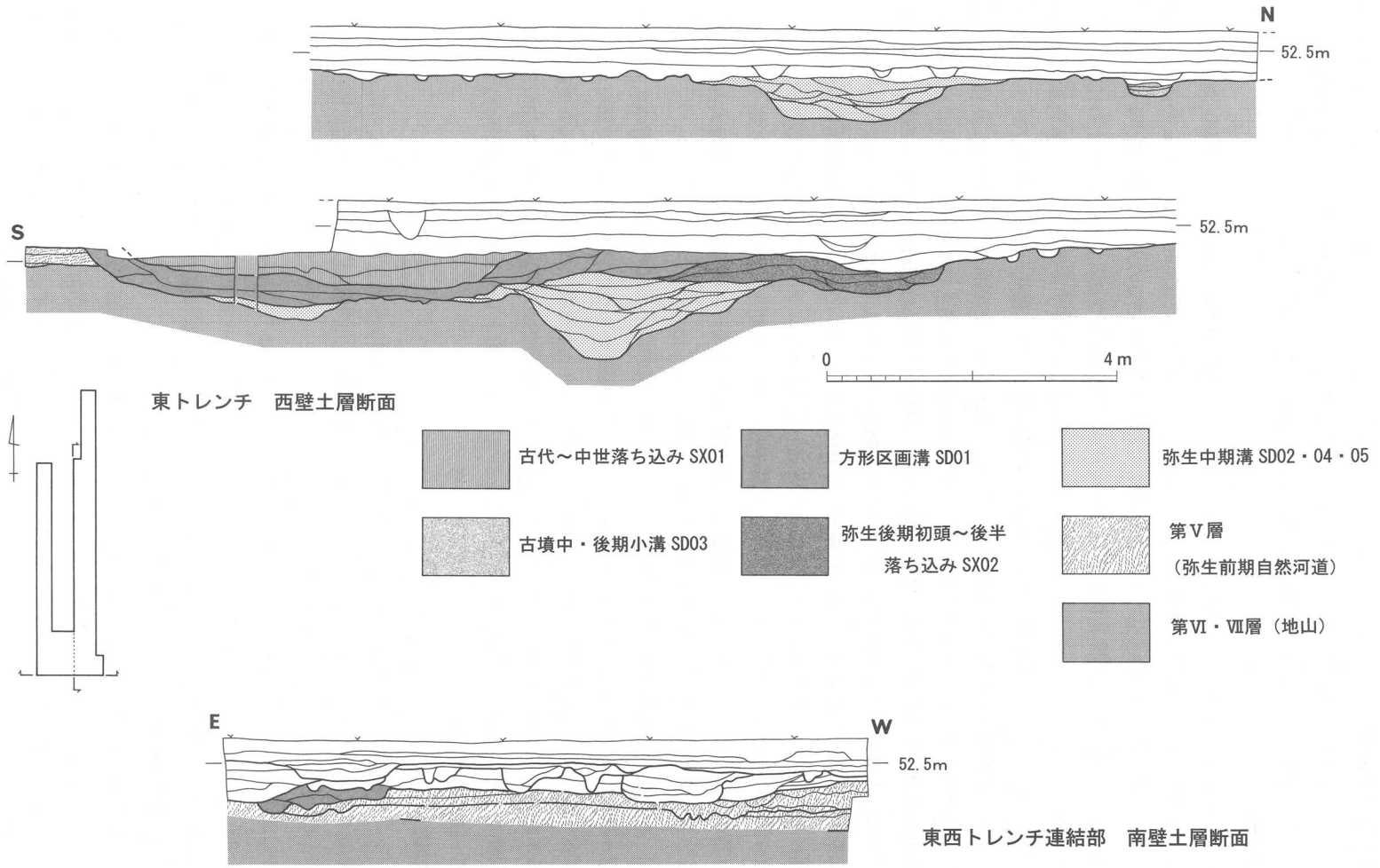


図5　調査区土層断面図（S=1/80）

平面的には条里地割に沿うほぼ東西に延びる幅広な溝であり、埋土の状況からは灌漑水路あるいは貯水を目的とした水溜めの施設として考えられるものである。また、その機能時期については瓦器椀や土師質土器の年代観から中世前期の11世紀前半以前に終焉を迎えたものと思われる。

大溝SD01

本調査の目的として当初より検出、確認が予想された方形区画溝の一部である。調査区南側で平面的には北東～南西方向の直線的な大溝として確認している。幅約8.4～9.0mで東西10m分の延長距離を検出したが、上部には前述の落ち込みSX01が重複して西トレンチ側までの大半で南肩部が切られ削平、破壊を受けていた。そのため遺存状況は悪く、残りの良い部分でも深さ約0.6mほどの埋土の残存が見られるに過ぎない。ただ、そうした上部の破壊は部分的であるため残存する南北肩部から溝底面までの深さが約0.8m前後であることは把握できた。埋土は北側肩部で上半に褐灰～黄灰色粘土ブロック混じり粘質土～粘土、南側肩部付近では灰黄褐～灰黒色の炭・粘土ブロックを混在する粗砂混じり粘質土～粘土となり、以下の下半から大溝底面直上までには黒褐色粗砂混じり粘土の堆積がレンズ状に見られた。

遺物出土状況は上下の埋土全体でも土器類の密集、埋積する様子は認められず極めて疎らな在り方を示していた。上部における重複遺構の存在からも遺物量の少なさは理解できるが、大量の弥生後期末～古墳前期土器を出土した第８次東調査区検出の方形区画溝との違いとして、今回の検出位置が集落の外縁辺側に近接することもその要因と思われる。出土土器は総数でコンテナ５箱程度であるが、完形品は含まれずほとんどが破片資料であった。出土土器の内容は弥生後期土器が主体的であり続く庄内・布留式の土器については少量であった。時期幅ではほぼ弥生後期後葉～古墳前期初頭（布留式古相）の間に該当し、第８次調査検出の方形区画溝出土土器群と同様であった。

次に、西トレンチ検出の北肩付近（図６）では方形区画溝の埋土上部の窪みに広葉樹の丸太材半裁木材の刳り抜きによる木樋状の木製品を検出している。出土層位から原位置を保つものではなく、その機能的役割を終えた後に廃棄されたものと判断できるが、こうした遺物の残存から周辺に方形区画溝に付随する水路整備の痕跡の存在が想起されよう。また、北肩付近では方形区画溝底面で下部の遺構群との重複関係が明瞭に確認でき、直下の弥生中期溝SD04との間に東トレンチ側で平面的に検出できなかった北西～南東方向に延びる溝SD06を確認している。

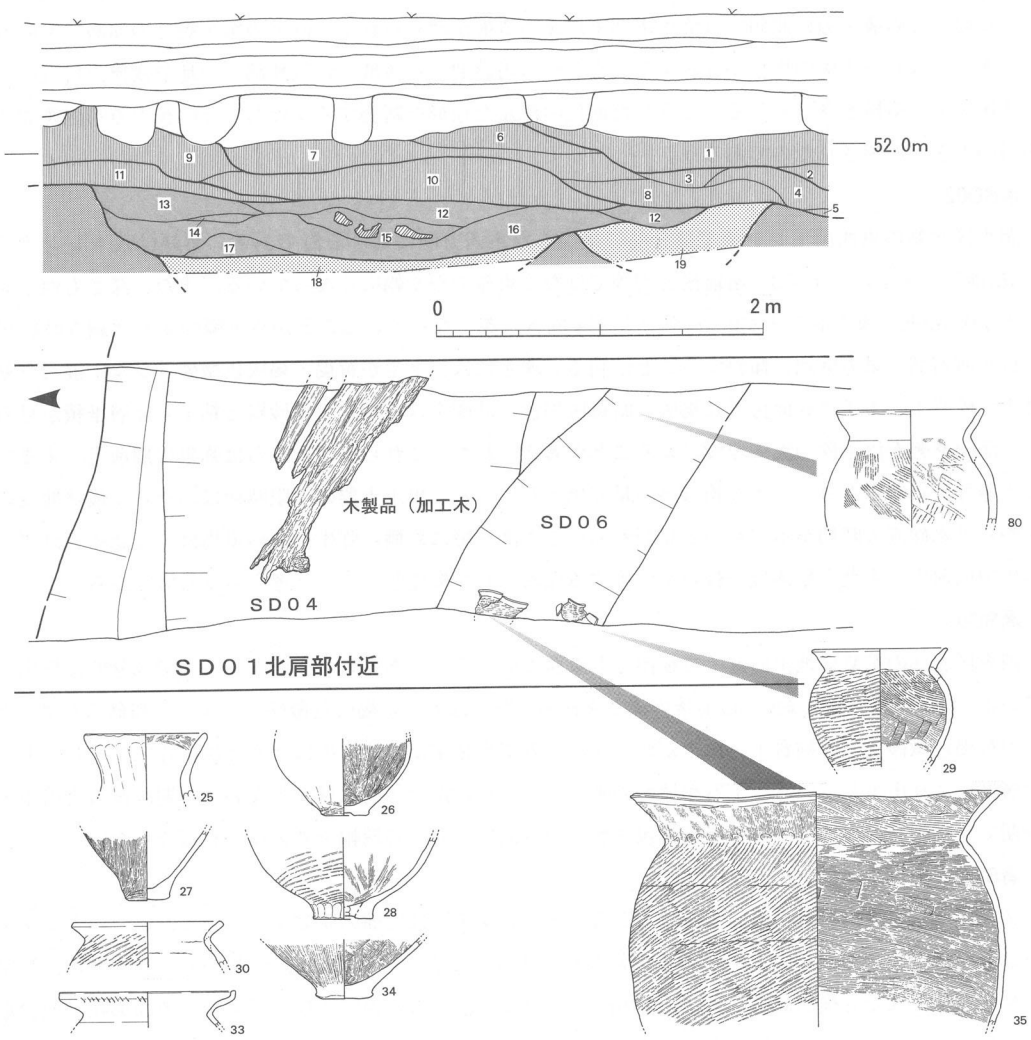
溝SD06

東トレンチ南側の大溝SD01北肩部底面で検出した幅0.8～0.9m前後、深さ0.3m以上の溝である。北側側縁の一部分が弥生中期溝SD04の南肩部分西側付近に重複して検出しており、断面形状は半円もしくは逆台形を呈するものと思われる。

調査時には埋土上半のみ掘削し下部は未掘であるが、埋土上部より弥生後期初頭から前葉の甕形土器片（図11－**80**）を含む少量の土器片が出土している。時期については遺構間の重複による前後関係から溝SD04埋没後より大溝SD01掘削以前の間にあり、弥生中期末～後期初頭頃と考えられる。

溝状落ち込みSX02

調査区中央南寄りの位置に東西両トレンチで部分的に検出した浅い落ち込みである。前述の大溝SD01に先行し、東西両トレンチ土層断面から深さ約0.45mまでの遺存が看取できる。平面的には北側に膨らむやや緩い弧を描くものとなっているが、上部を後世に著しく削平されることからもほぼ東西に延びる溝状遺構と考えられよう。埋土は上部がにぶい黄褐色粗砂混じり砂質土、下部から底面直上までに褐灰～灰黄褐色微砂混じり粘質土・粘土の堆積を示し、上下ともに一部半完形のものを含む多くの弥生中



西トレンチ（南）東壁　方形区画大溝 SD01 北肩部付近土層断面図

1．10YR4/1 褐灰　粘質土（土器片含む）
2．7.5YR4/1 褐灰　粘質土（土器片含む）
3．7.5YR4/1 褐灰　微砂混じり粘質土
4．10YR3/1 黒褐　粗砂・微砂混じり粘質土
5．2.5Y3/1 黒褐　砂混じり粘質土
6．7.5YR4/4 褐　砂混じり粘質土
7．5YR3/2 暗赤褐　粘土ブロック混じり砂質土
8．10YR4/1 褐灰　シルト混じり粘質土（土器片含む）
9．10YR3/2 黒褐　粘土ブロック混じり砂質土
10．10YR3/2 黒褐　粘質土ブロック混じり砂質土
11．10YR2/3 黒褐　粗砂・微砂混じり粘質土
12．10YR2/2 黒褐　粘土ブロック混じり粘質土
13．10YR2/2 黒褐　微砂混じり砂質土
14．10YR4/1 褐灰　粘質土
15．5Y3/1 オリーブ黒　シルト混じり粘質土
16．2.5Y3/1 黒褐　シルト質粘土（植物遺体・土器片含む）
17．5Y3/1 オリーブ黒　シルト質粘土
18．10YR3/1 黒褐　シルト混じり粘質土
19．10YR3/1 黒褐　粘土ブロック混じりシルト質粘土

図 6　大溝SD01平面・土層図（S＝1/40・土器図S＝1/6）

期末～後期前半以降の土器片が出土している。溝としての機能時期は概ね後期初頭と考えられるが、埋土の状況から洪水砂の流入による埋没も考えられ、埋没時期の下限は弥生後期中葉～後葉の間と思われる。なお、この溝を境に北側では弥生中期末以後の遺構が認められず、直上の第Ⅳ層との間層にも砂混じりあるいは砂質土壌の堆積が介在する点などから当該期の集落域外縁低地部への地形変換点付近に近い状況を示す遺構と考えられる。こうした前代の窪んだ地形を踏襲するかたちでその後の方形区画北辺相当の大溝が掘削されたのであろう。

溝SD02

調査区北側の東西両トレンチで部分的に検出した東西方向に延びる溝である。溝幅は西トレンチで2.8m前後、東トれンチで3.0m前後と均等ではなく東側でやや幅広くなっている。また、深さも西トレンチが0.4m弱、東トレンチが0.5m強と若干東向きに深くなっていることから東隣の第6次調査時検出の自然河道側の東方低地に傾斜することが判る。埋土には、上半が黄褐～褐灰色微砂・シルト混じり粘質土・砂質土、下半～底面付近に褐灰～暗黄灰褐色の砂礫を含む砂質土や砂層と粘土の互層堆積が見られ、溝の廃絶が洪水砂の流入埋没によることが考えられた。これらの埋土からは弥生中期前半～末までの土器片、石器類がコンテナ3箱ほどの量で出土している。出土土器の下限時期はおそらく最終埋没にかかる洪水砂流入時期を示すものと思われる。この溝を境に北側に弥生中期の遺構は全く認められず、弥生中期前半～中葉の集落域の縁辺を区画する環濠として機能していたと考えられる溝である。

溝SD03

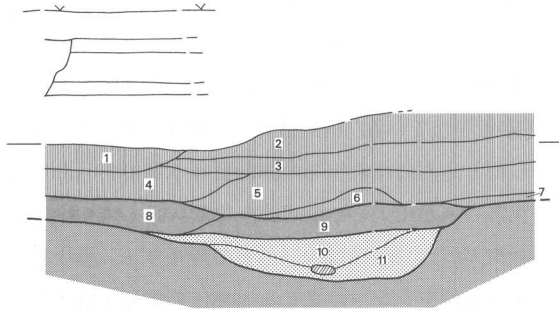
調査区北部の第Ⅵ層地山面直上で検出した東西方向の小溝である。東西両トレンチで部分的に検出している。幅0.6～1.0mで約0.3m前後の深さを測る。埋土は上半が褐灰色微砂・シルト・粗砂の互層、下半が黄褐色微砂混じり粘質土・粘土がわずかな厚みで堆積する。遺物のほとんどは小片で主として上部砂層堆積より出土している。土器や埴輪の破片が含まれるが全体的に量も少ない。時期は概ね古墳中・後期で廃絶時期については第Ⅳ層遺物包含層の形成直前までの時期幅を考えなければならない。

溝SD04

調査区南側で検出した東西方向の溝である。東トレンチでは底面の確認までに至ったが、西トレンチでは上面検出のみおこない未掘である。溝の上部は前記の落ち込みSX02や大溝SD01により破壊、削平されるが、それでも検出面の上面幅約3.0m、深さ1.0m前後の規模で遺存していた。断面形状は逆台形を呈し、埋土は上中下の3層に大別可能である。上層は黒褐～暗灰色粗砂混じり粘質土・粘土、中層は淡灰～灰黒色微砂・シルト混じり粘土でいずれも多量の土器と少量の石器類や木製品、自然木と獣骨等の動植物遺体等を含んでいた。下層の底面直上までは暗黒色粘土で植物層の沈殿は見られるものの土器等の遺物はわずかに含まれるのみであった。出土した土器類は弥生中期後半～末の時期幅を示し加工痕跡が明瞭な木製容器の未製品（図11-79）も出土している。溝の機能としては弥生中期後半の環濠と考えられるが、概ね弥生後期初頭には埋没していたものと思われる。

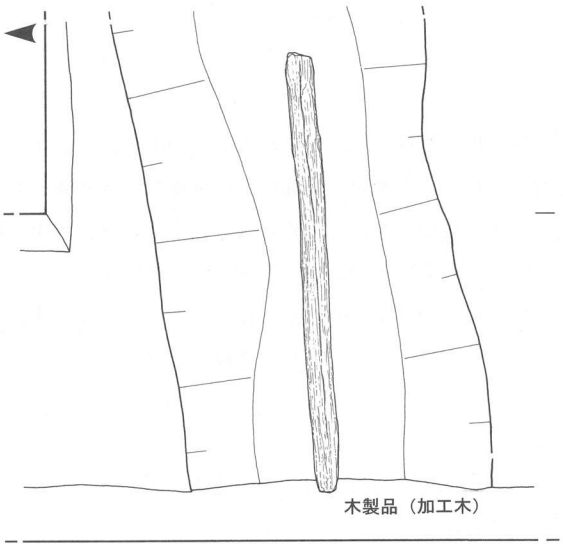
溝SD05

調査区南側の東西両トレンチ連結部で連続的に検出した東西方向の浅い溝である。上部の大半を大溝SD01により削平されるが約0.3m程度の深さで埋土の遺存が認められた。溝幅は残存部で最大約2.0mを測り、埋土は炭や植物遺体を含むオリーブ黒色シルト質粘土が主体となるが底面直上では両肩部に厚く灰色微砂混じり砂質土が堆積する。遺物は上部の黒色粘土から弥生中期末の土器片が多く出土しており溝の西半では長さ2.7mの加工木材も出土している。溝の規模等の残りは悪いものの前述の溝SD04と



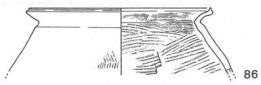
東トレンチ（南）東壁　溝 SD05 土層断面図

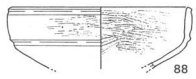
1．10YR4/1 褐灰　粘質土（やや砂質・土器片含む）
2．7.5YR6/4 にぶい橙　微砂混じり粘質土
3．10YR4/1 褐灰　シルト混じり粘質土
4．7.5YR4/1 褐灰　粘質土（土器片含む）
5．5Y4/1 灰　粘質土
6．5Y2/1 黒　微砂混じり粘質土
7．7.5YR3/1 オリーブ黒　シルト質粘土
8．2.5Y3/1 黒褐　砂混じり粘質土
9．5GY3/1 暗オリーブ灰　シルト混じり粘質土～粘土
10．5Y3/1 オリーブ黒　粘質土～粘土
11．5Y4/1 灰　微砂・細砂混じり砂質土



ＳＤ０５（西）

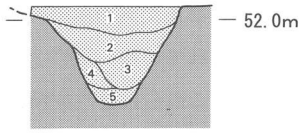
0　2m

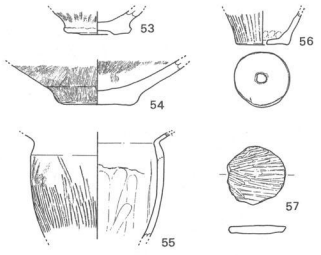


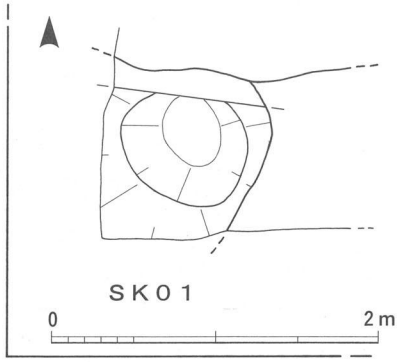


東西トレンチ連結部（南西隅）土坑 SK01 土層断面図

1．10YR3/2 黒褐　粗砂混じり砂質土
2．10YR3/3 暗褐　微砂・細砂混じり砂質土
3．10YR2/1 黒　シルト混じり粘質土
4．2.5Y3/1 黒褐　シルト混じり粘質土
5．5Y3/1 オリーブ黒　シルト混じり粘質土







ＳＫ０１

0　2m

図７　溝SD05・土抗SK01平面・土層図（S＝1/40・土器図S＝1/6、木器図S＝1/18）

同様に集落縁辺を囲む環濠と考えられる弥生中期後半～末の溝である。

土坑SK01

調査区南西隅の位置で検出した土坑である。大溝SD01や溝SD04・05より南では弥生時代の溝以外の遺構は確認できなかったが土坑SK01の１基のみが確認されている。検出地点では層序が異なり、検出面直上まで中世前半期の耕作等による削平や上部から掘り込みのため実際の掘削面は不明であった。しかしながら、埋土からはコンテナ１箱分の弥生中期土器のみが出土したため弥生中期後半～末の土坑と判断しておきたい。直径約1.2m前後の不整形な平面形を呈し、深さは約0.6mまで遺存する。埋土は上部が砂質土、下部が粘質土をそれぞれ基調とし、いずれも砂やシルトの混じる黒褐色の堆積土壌である。なお、先述の遺物はほぼ埋没時に埋土中に偏りなく混入したものである。

３．出土遺物の概観

今回の調査では、コンテナ総数約30箱の量で遺物の出土が見られた。これら遺物の大半は土器類であるが、ほかに埴輪片や瓦類、木製品、石器類等も見られた。土器類では弥生～中世後期の各時期のものが含まれており、数量的にはその約７割近くが弥生中・後期のもので占められている。以下、各出土層位および検出遺構ごとに概観を記しておく。なお、個々の遺物についての観察や法量等の記述については大幅に割愛し、主要遺物および特筆すべき遺物についてのみ重点的に記したものとしている。また、石器類ではサヌカイト製打製石器や結晶片岩製石庖丁等が出土しているが、本概報では図示、概要ともにすべて省略したものとなっている。

遺物包含層出土土器・瓦類（図８）

第Ⅲ・Ⅳ層の上下の遺物包含層からは弥生土器小片を主体に中世後期までの遺物が出土している。ここに図示したものには一部第Ⅱ層下部出土遺物も含まれる。

古墳時代以降の遺物で特筆すべきものに**１・２**の埴輪類の出土がある。ともに円筒埴輪片であるが、**１**は上端がやや内径する形態的特徴から朝顔形埴輪と考えられるものである。また、突帯断面形状が矩形を成し埴輪の編年観から古式の様相を示すものである。出土地点・層位は東トレンチ第Ⅲ層である。**２**の埴輪片は今回調査地の南に近い第４次調査検出の岩室池古墳にも見られる須恵質埴輪である。周辺の調査でも幾つかの出土例が認められている。次に**３～７**の須恵器各器種は古墳後期～律令期にかけての時期幅をもち、**８**の土師器高杯もこれらに伴う同時期のものである。**３**が東西トレンチ連結部第Ⅳ層、**４**が西トレンチ第Ⅱ層下部、**５・６**が西トレンチ第Ⅳ層、**７・８**が東トレンチ第Ⅳ層よりそれぞれ出土したものである。

９の土師質小皿は内面に煤や口縁部付近に油煙の付着が見られる灯明皿として使用されたものである。白色系の胎土と形態から概ね近世初頭の時期が考えられる。西トレンチ第Ⅱ層より出土している。

瓦類には平瓦、丸瓦の破片と軒丸瓦の瓦当小片がある。図示した**10～17**のうちの両側端に面取りが残る平らな小型品の**16**を除きすべて平瓦片である。**10～14**は凸面に格子目叩き、凹面に布目圧痕の見られる一群である。この種の格子目叩きの残る瓦類は第８次調査区全域で出土しており、古新羅系六葉単弁蓮華文軒丸瓦を伴う７世紀末葉頃の白鳳期の瓦類である。また、**15・16**の凸面縄目叩き後ナデのものや**17**の凸面縄目叩き後ナデ消してコビキ痕の残るものも後出する要素を示すが、こうした８世紀代以降の奈良・平安期瓦類については第６次、第８次、第10次、第17次の各調査地でも出土しており広範囲にわたる分布が知られる。**16**の小型品はおそらく道具瓦として使用されたものであろう。これらの出土地点

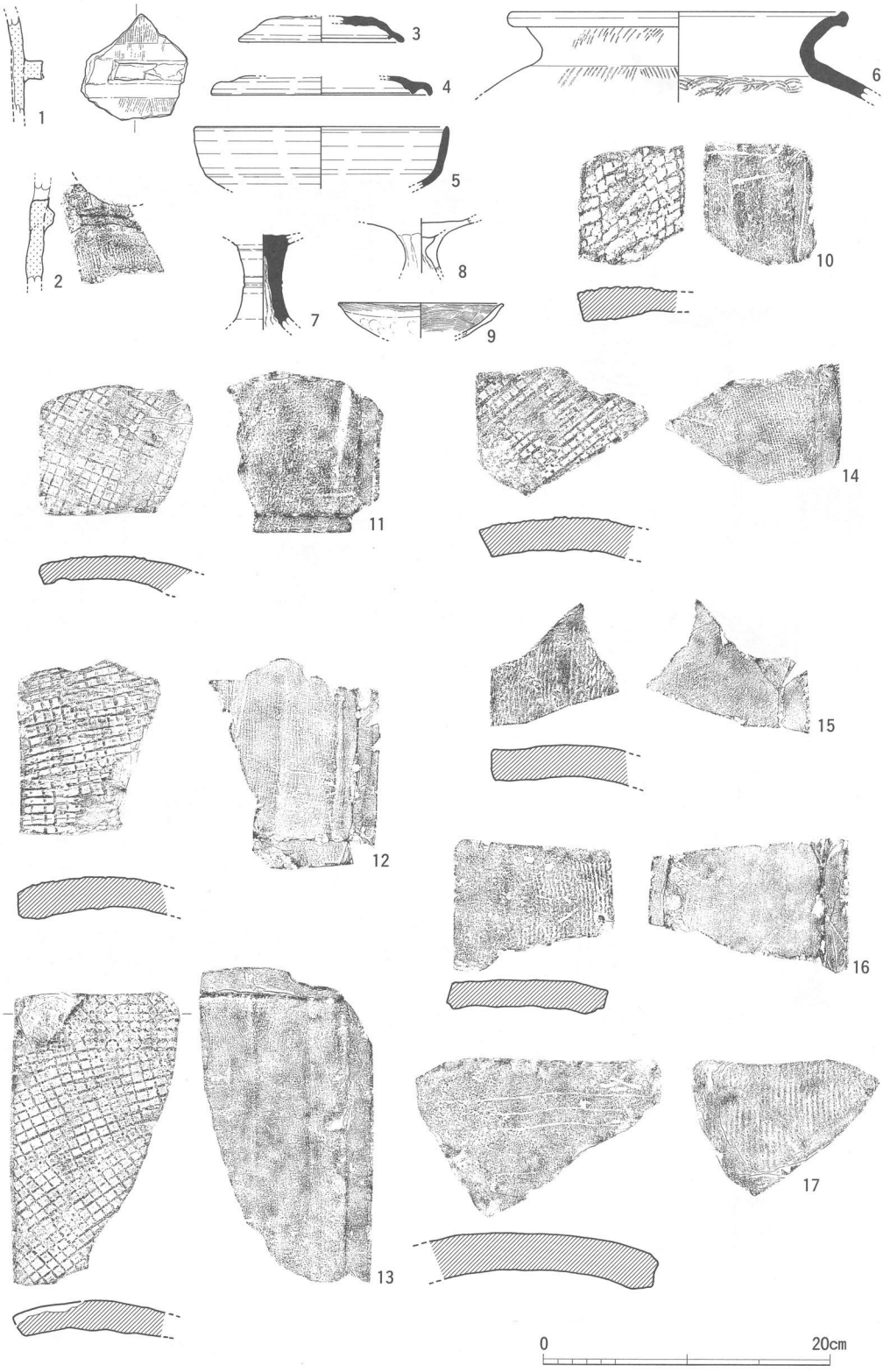


図８　遺物包含層出土遺物実測図（S＝1/4）

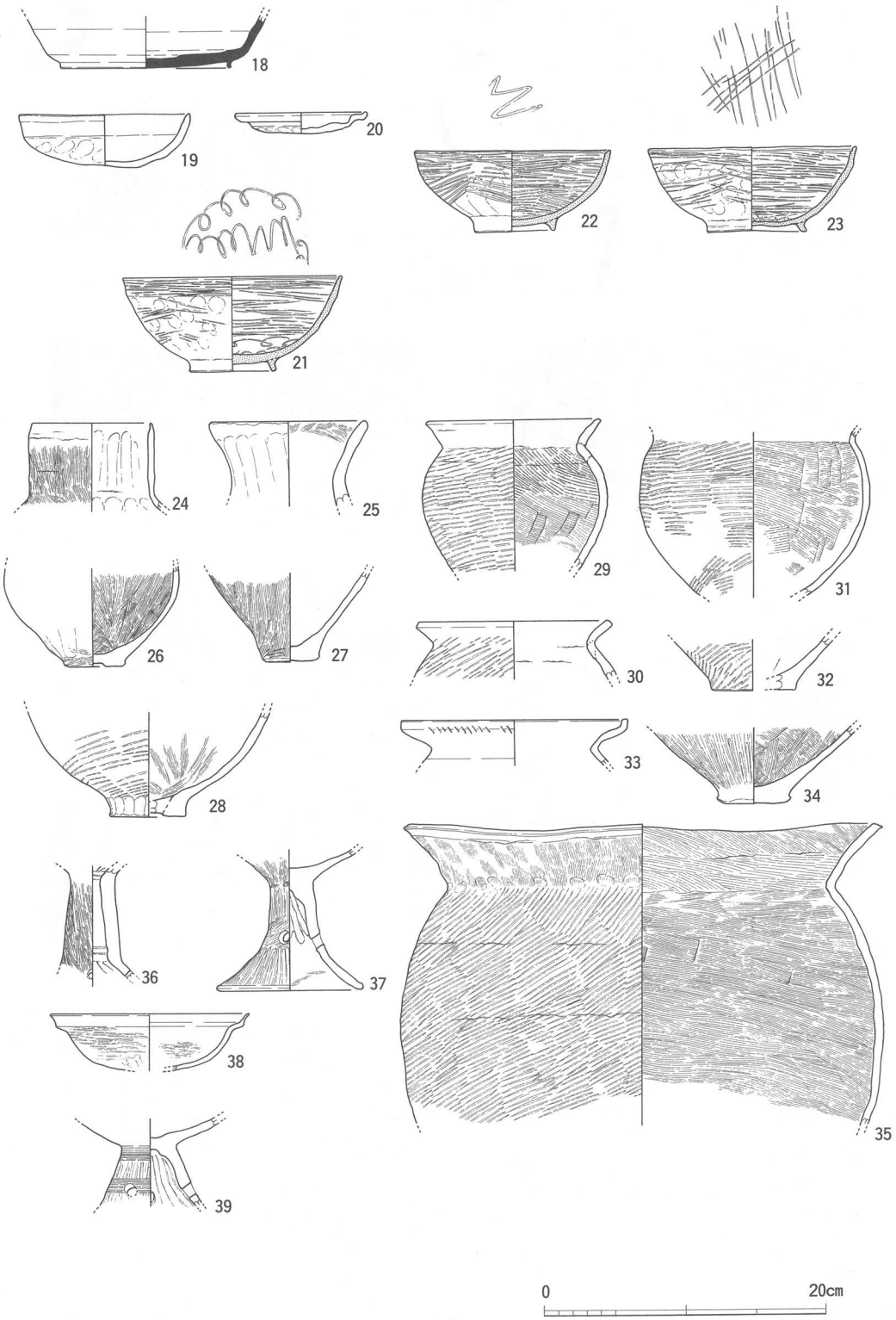


図９　各遺構出土遺物実測図１（S＝1/4）

と層位は、西トレンチ出土のものでは15・16が第Ⅱ層下部、17が第Ⅲ層、10が第Ⅳ層、東トレンチでは12・13が第Ⅲ層、11・14が第Ⅳ層よりそれぞれ出土している。

溝状落ち込みSX01出土土器（図９－18～23）

18は須恵器杯である。全体にロクロナデ成形で仕上げられ高台は薄く低い。19は完形の土師器杯である。外面底部付近までに指頭圧が明瞭に残り、口縁部をヨコナデする。内面には放射状ミガキ等は見られずナデのみの調整である。20は「て」の字状口縁の土師質小皿である。次の21～23の瓦器椀と併存する型式である。瓦器椀には見込みの暗文に連結輪状、ジグザグ、格子目の三種が認められる。形態的にはいずれも明瞭な高台が付され、器面調整では内外面ともにミガキ調整が密に施されている。これら出土土器は概ね９世紀～11世紀前半の時期幅に収まるものである。

大溝SD01出土土器（図９－24～39）

弥生後期後半～末を主体に古墳前期初頭までの時期幅の土器が出土している。壺では24・26外面ハケあるいはナデ調整による調整の省略化の進む長頸壺や25の直口外反口縁、胴部球形化の顕著な28など後期でも新出の要素が見られる。

甕では29～31の分割成形の叩き甕に加えて33のような在来化した受け口状口縁甕も見られた。35の大型品は当該期の甕としては極めて巨大なものであり、類例も少ない。高杯には脚柱部のみの36、杯底部から脚裾部まで残る37のほかにも脚部外面に櫛描き直線による施文のある東海影響の高杯もあり、一部に後期末～庄内期に通有な杯部形態の小片も見られた。他に38の有段屈曲鉢や布留形甕の小片もあり断片的ではあるが古墳前期までの連続した時期の土器片が多く含まれていた。

溝SD02出土土器（図10－40～49）

40は広口長頸壺の頸部上位より口縁まで残る破片である。外面には多条に櫛描き直線文が巡らされる。41・42の底部はいずれも壺底部片と思われる。42の外面底部付近には器面の剥落が見えるが、その下面にも粗いハケ調整が見られ製作手順の一端が窺えるものである。43はいわゆる大和型甕の底部である。器壁は薄く外面の粗いタテハケが特徴的である。44～47の小片には櫛描文様による各種施文が見られるが、他の破片にも簾状文施文のものは極めて少なく直線文が主体的に出土している。なお、47は伊勢湾沿岸地域からの搬入品である。48・49は土器片再利用の土製円盤である。調整は器面の摩滅のため看取不可能なため本来の器種については特定できない。これらの土器片に加えて弥生前期前半期の土器片も混入して出土しているが、全体的には弥生中期中葉までを主体とする。

溝SD03出土土器（図10－50～52）

50は内湾する口縁の端部に内面肥厚のみられる布留式の甕である。口縁のみであるため詳細な時期は特定できないが古墳前期～中期前半までの時期幅に収まるものである。51・52は埴輪片である。いずれも焼成は埴質である。52の基底部片では底部外面付近の板状工具による押圧調整が特徴となる。底部径も小さく省略化された普通円筒もしくは形象埴輪の一部分かもしれない。以上の諸特徴からこれらの埴輪の時期は古墳後期と思われる。

土坑SK01出土土器（図10－53～57）

土坑SK01では出土土器のほとんどが小片であったため図示し得たものは少ない。53・54は壺底部である。どちらも概面は細かいハケ調整である。形態的には中期でも新しく位置付けられるものである。56は大和型甕の底部片である。底面中央に焼成後の円孔を穿ち甑としての利用が窺える。57の土製円盤は壺等のミガキ調整痕を施す土器片を再利用したもので穿孔以前の紡錘車未成品と考えられる。

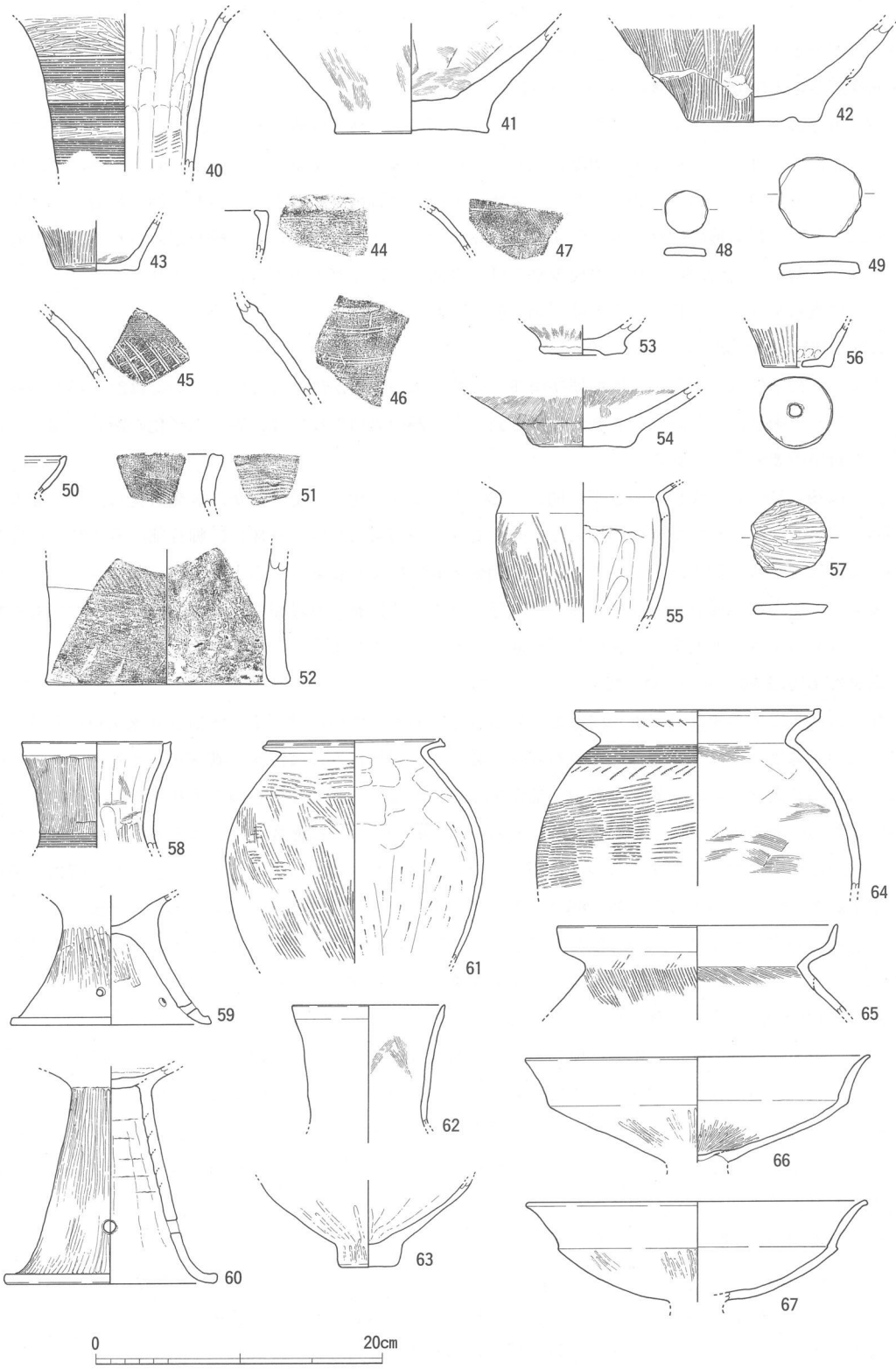


図10　各遺構出土遺物実測図２（S＝1/4）

溝状落ち込みSX02出土土器（図10−58〜67）

甕、高杯などに半完形のものがまとまって出土している。58〜61の土器は弥生中期末〜後期初頭の一群である。58の短頸直口壺には口縁部形状に近江〜伊勢湾沿岸の要素が認められるものである。59は台付き鉢脚部、60は脚部形態が特徴的な高杯脚部である。61の瀬戸内型甕には外面叩き後ハケと内面下半に明瞭な削り調整が見られ、口縁端には凹線が巡る。器壁は薄く中期末でも新相を呈する甕である。62〜67の土器は弥生後期後半までのものを含み大溝SD01の土器の混入も考えられる。62は摩滅した長頸壺の口縁部片であり調整痕は看取できない。63は突出した底部をもつ壺底部である。64・65の甕は受け口や有段の口縁を呈する。64は外面頸部直下に櫛描直線文、口縁外端面と体部上位に櫛歯列点文を施す近江系要素が濃厚な在地産の甕であるが、これらの装飾は叩き成形後に施文されている。65は口縁部形状だけでなく内外面ともにハケ調整による仕上げが特徴的な甕である。

これらの土器群は弥生中期末〜後期後半までの時間幅で上部遺構埋土の混入も含むが、基本的に後述の溝SD04・05埋没後の調査区南部低地部に廃棄された土器群であると考えられる。

溝SD04出土土器・木製品（図11−68〜79）

68〜72は各種の壺である。68には外面頸部付近に簾状文が残る。69の大型品の口縁外面には綾杉状の櫛歯列点や多条の櫛描直線文による施文が見られる。70には粗いハケ調整を地文とした外表面に櫛描直線と波状文による装飾が加えられている。71・72は壺の底部のみ残るものである。73〜76の甕では大和型と瀬戸内型の両者が見られる。また、73のように胴部施文と形態に折衷的要素の見られるものも存在する。74は外面の粗いタテハケを特徴とする大和型甕の典型品である。77も大和型甕の底部である。75・76は外面叩き成形後ハケ調整する瀬戸内型甕である。いずれも口縁端には明瞭に凹線が施されるが、内面は板ナデ調整である。78は台付き鉢の脚部のみ完形に残るものである。上部には大きく開く鉢部が取り付くものと考えられる。調整は摩滅のため看取できない。

79の木製品は木製容器として製作途中の未製品である。手斧による調整痕跡が周囲に明瞭に残るが、刃先部分の調整面の形状から石器（扁平片刃あるいは柱状片刃石斧）使用によるものと考えられる。また、原材からの木取り位置についても外表面の年輪や板目・柾目の方向から看取できるために木製品製作時の選定意図を窺い知れる良好な事例となるものである。樹種については不明であるがおそらく広葉樹を原材料としている。

溝SD06出土土器（図11−80）

80は単純屈曲口縁の甕である。外面には粗いタテ・ナナメハケが残り叩き成形は認められない。内面には強い板ナデ痕跡が見られ、器面を掻き取るような調整が施されるが全体的に器壁は厚い。形態的に弥生後期初頭〜前葉の帰属時期が考えられる。

溝SD05出土土器・木製品（図12−81〜90）

溝SD05では遺構埋土の残りが少なかったため全体遺物量も少なく、ここで図示したものは90の大型板状木製品に共伴した土器片を主体としている。81・82の土器片は外面に櫛描簾状文を施す弥生中期後半〜末の壺の小片であり、87の鉢の形態と施文とともに出土土器の上限時期を示す。83は記号文的な線刻が見られる大型壺の破片である。次の84のような口縁形態の広口壺の胴部に施文されたものと思われる。84の口縁には明瞭な凹線が巡り帰属時期の特定は容易である。また、88・89の高杯も凹線文盛行期に属しており同様の時期のものである。85のほぼ完形の直口壺や86の甕は形態的に先述の土器より後出の要素をもつ。以上のように溝SD05出土土器は弥生中期末を主体とする土器群であることがわかる。

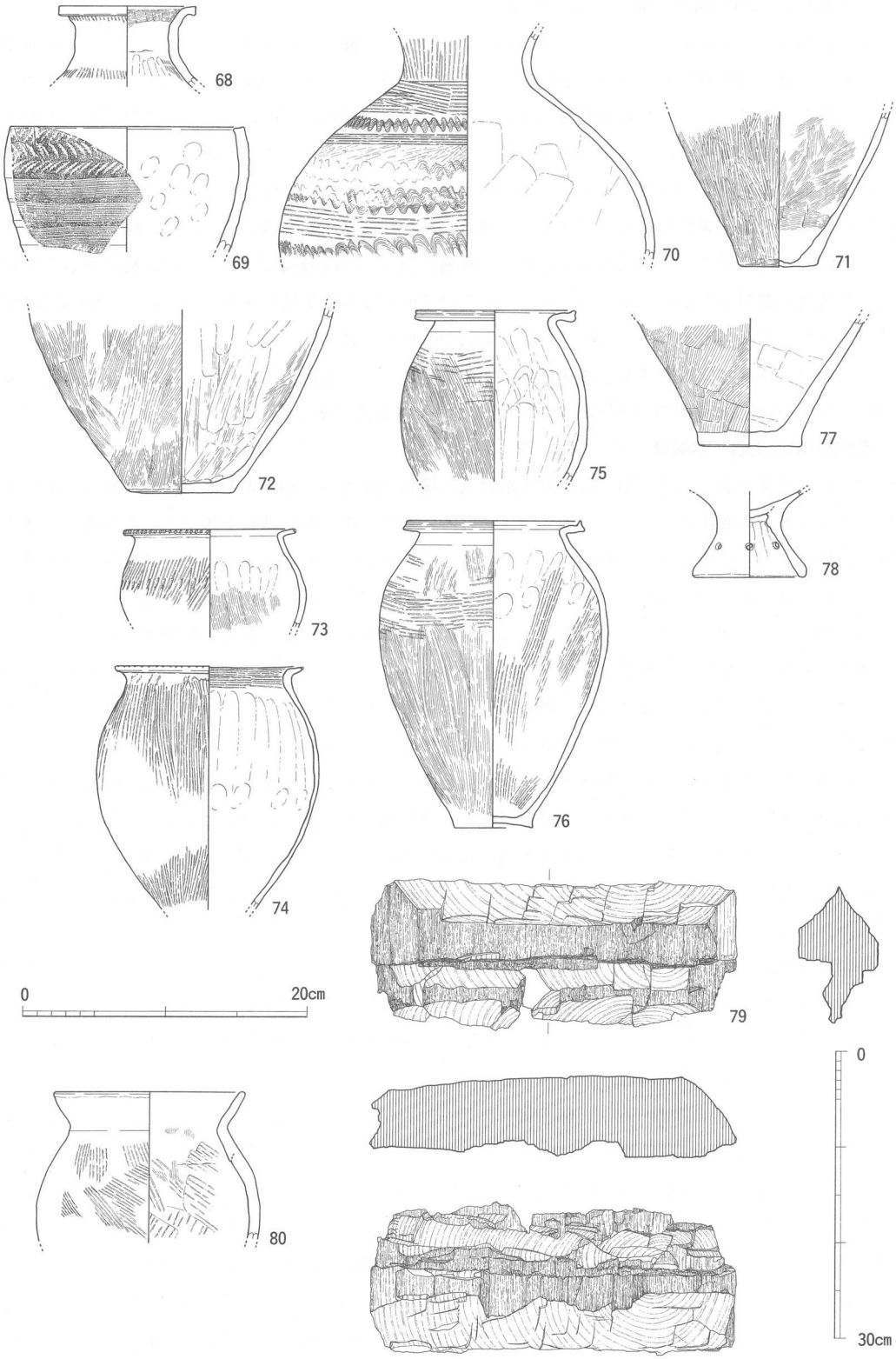


図11　各遺構出土遺物実測図３（土器図S＝1/4・木器図S＝1/6）

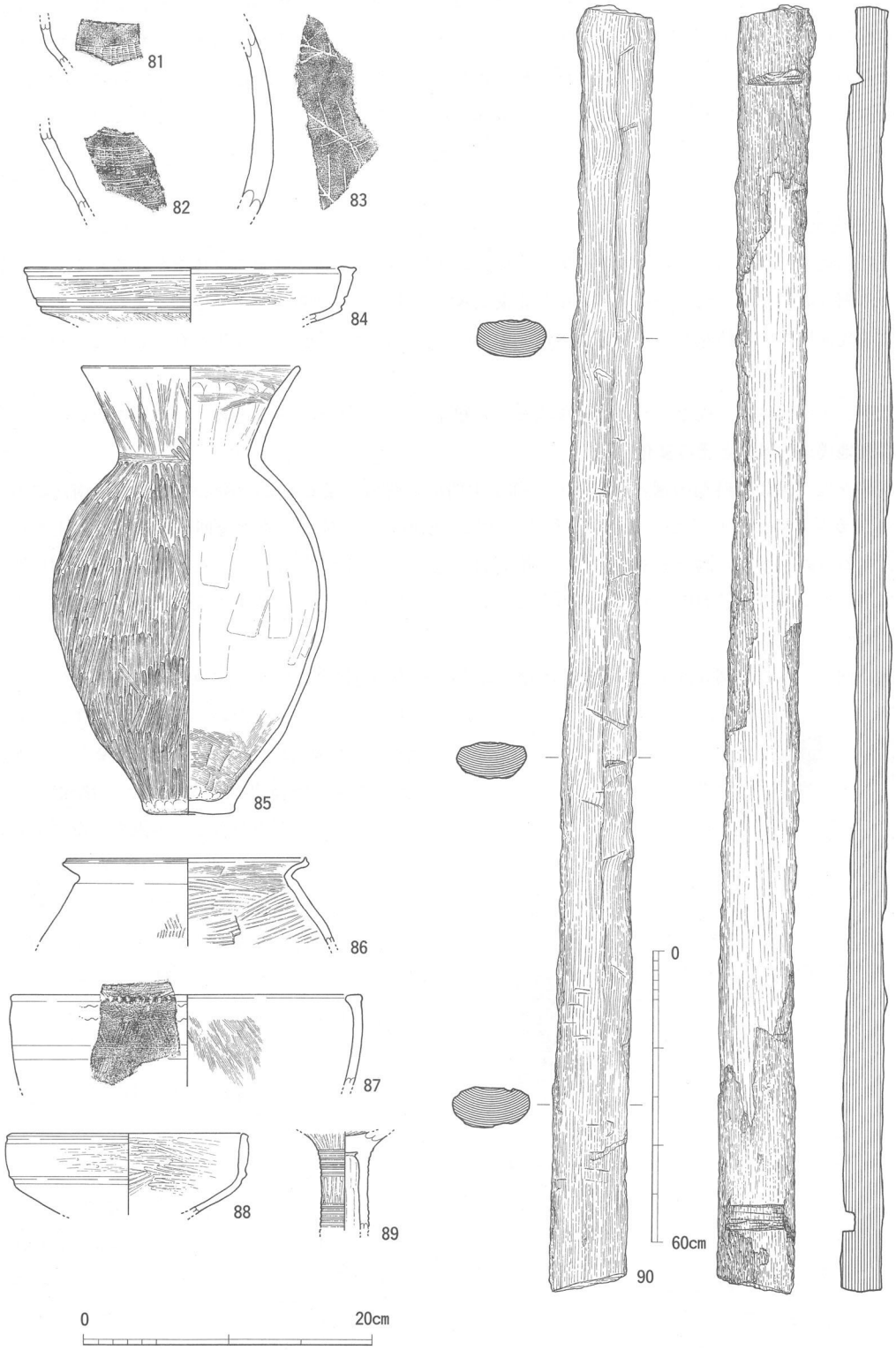


図12　各遺構出土遺物実測図４（S＝1/4・木器図S＝1/12）

90の木製品は丸太材半裁の原材料を加工したものである。半裁した側の面には表面に工具による加工痕がみられ、もう一方の丸太材の曲面側には樹皮が部分的に残るが、両端にはそれぞれ形状の異なる刳り込み加工が施されることから他の木材と組み合わせての使用が考えられる。長さ約2.7mで最大厚0.1mを測る。用途については住居、建物等の建築部材と思われる。樹種については同定しておらず不明である。

Ⅳ．まとめ

今回の調査では、当初の目的である第８次東調査区検出の方形特定区画の全体像を知るうえでの材料となる調査成果が得られたのと同時に集落北東部縁辺の状況をも知ることができた。また、予想以上に古墳時代前期以降の情報が上部からの古代～中世の遺構や後世の耕作により失われていたことが知られた。

以下、第21次調査の成果をもとに、現状までの知見を整理し本調査のまとめとしておきたい。

調査地周辺の景観とその変化

本調査地では最も時期の遡る遺構として弥生中期前半期頃の環濠となる溝SD02や調査区南西隅の土坑SK01が検出されているが、これに先行する北東～南西方向に延びる弥生前期～中期初頭の土器片を包含する流路状堆積が調査地南側において第Ⅵ層（地山）との間に介在していた。この弥生前期自然河道は第８次東調査区においても同様の方向で存在していたため、さらに北東方向の低地部へ延びるものと思われる。

次に図13に示した調査区南側の重複した溝、落ち込み等の遺構群の弥生中期以降の変遷過程について再度まとめておきたい。弥生中期前半には調査区北側の溝SD02が集落縁辺の環濠となるが、第８次調査時検出の大溝SD04、大溝SD07の延長となるものと思われる。本調査区南側では中期後半以後に環濠相当の溝の掘削が進み溝SD04→溝SD05の順に環濠が形成されている。これらの溝が併存していたかどうかは上部削平のため不明であるが、出土土器に見られるわずかな重複期から、併存していたとしても中期後半～末の短期間のみであったと考えられよう。なお、この時期にも環濠付近には南端部を除いては土坑等の遺構はまったく見られず、まさに集落外縁の様相を示していた。

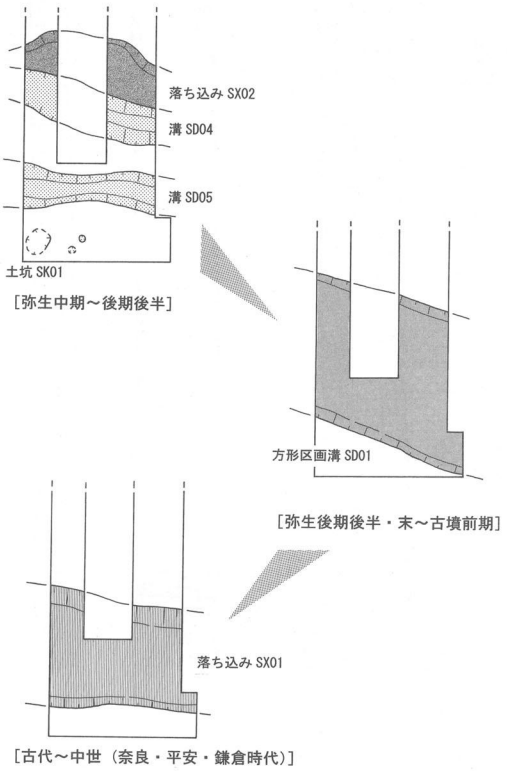


図13　第21次調査区南部における遺構の変遷（S=1/400）

弥生中期段階の環濠廃絶後は調査区南側全体が窪んだ地形を残しており、この北肩付近を人為的な掘削あるいは自然形成された窪みに流入した土器群が溝状落ち込みSX02出土土器群である。ここでは弥生後期中葉以降の土器に半完形のものが多く認められたが、北肩側だけでな

く窪地全体に土器流入が始まって上部に方形区画大溝SD01の開削が始まる直前の時期の廃棄土器群と考えられよう。

弥生後期後半には方形区画大溝SD01が掘削され、調査では内部囲郭部分をわずかに検出している。ここでは弥生前期河道と上部の堆積層の残存を確認しているが、囲郭内部の遺構は認められなかった。また、微高地を囲むかたちであったためか、直上では中世土器片までを含む第Ⅳ層（遺物包含層）の堆積があり著しく削平が進む様子が窺われた。大溝では南北両肩部を確認しているが、両岸ともにほぼ平行する平面形を呈していた。以前の調査で検出した方形区画大溝からは内郭部で約30mの距離を挟んで平行する位置関係であった。従って方形特定区画については東側の南北一辺については不明な点を残すものの現在の知見ではほぼ方形を成すものと考えられる。なお調査では北肩付近に原位置から遊離した丸太半裁刳り抜きの木樋状木製品を検出しており、付近に区画大溝に付随した水利施設の存在が想定される。

大溝SD01には、その後に古墳前期までの土器の流入が見られるが古墳中・後期の時間的な間隔を開けつつ、上部に古代～中世の遺物が出土する東西方向の落ち込みSX01が掘削されている。これは連綿と続く遺構間の重複による窪んだ地形をさらに利用したためと思われるが、条里区画に見合った東西方向に向く平面形からは灌漑水路としての機能も推定できよう。その場合、東側低地部に複数存在した自然河道よりの導水のために開かれた大溝と考えられ、周辺地域における初現的な耕地化推進のための施設として理解できるものである。詳細な開削時期は不明であるが、その終焉については完形で多く出土するやや古い形態の瓦器椀の時期から機能時期の下限を窺い知ることができる。いずれにせよ、本格的な条里型水田の確立以前の存在から特筆すべき遺構と言える。

第21次調査の成果による新知見

本調査地における特徴として、当該地が弥生環濠集落の北東縁辺に該当することが挙げられる。また、中世以降の耕地化による削平が著しく出土遺物量も従前の当遺跡内における調査に比べて少ないことも特異な状況となっている。

弥生後期以降の集落様相については次項に譲り、ここでは弥生中期の集落縁辺を示す状況と弥生後期の方形区画大溝等について今一度強調すべき点を記して本調査成果のまとめとしておく。

調査区北側では上部の第Ⅲ・Ⅳ層遺物包含層中にも弥生中・後期の遺物は微量に含まれたのみであった。そのため本来的には集落外

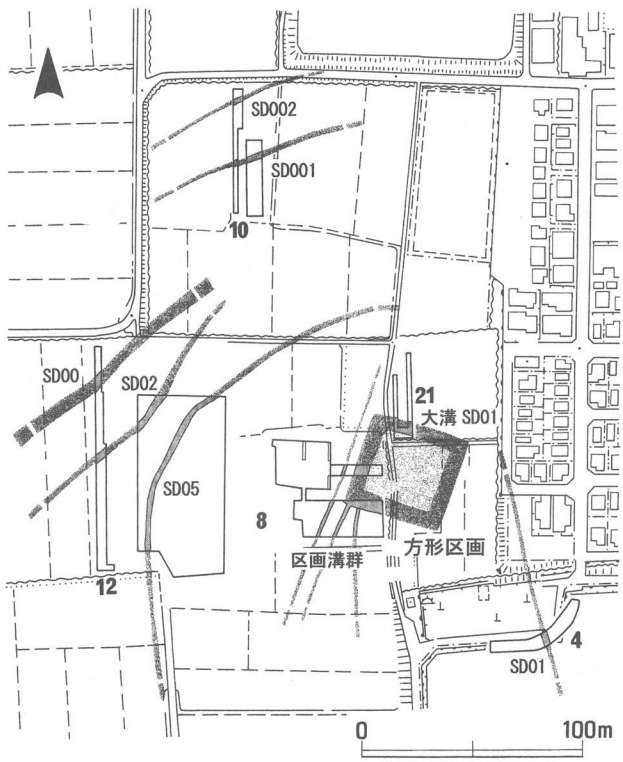


図14　平等坊・岩室遺跡北辺における弥生後期以降の環濠配置と方形区画（S=1/3000）

縁として考えられる状況であったことから集落範囲確認の目的は果たせたと考えている。検出された溝SD02・04・05等の弥生中期の環濠はそれぞれの時期の集落を囲む溝として追認することができ、第8次調査時のような多重環濠を形成しない点も確認している。この要因として調査地北部より東方に拡がる後世の削平を受けた部分が本来は河岸付近の微高地で自然堤防となっていたことが考えられる。おそらく調査地南端付近の弥生前期自然河道埋没後は沖積作用による微高地の形成が進み、方形特定区画の位置として適当な自然地形となっていたことが推測される。

方形区画大溝SD01については報文中にも触れたように遺物出土量が極端に少ない。これは第8次調査地での在り方が集落内部に近いことで遺物廃棄と再掘削が繰り返されることが多く見られたためであり、対照的にその背面側の本調査地では溝の廃絶が自然堆積によることでの相違を示したのであろう。すなわち、方形区画の北辺では重要な位置付けをもつ建物や祭祀行為にかかる施設等は設置されず、空閑地もしくは水利面での裏口的な在り方を考えねばならない。また、木樋の存在と低地部に近いこともその強調材料となろう。

環濠配置と方形区画の変遷

ここでは弥生後期の環濠と方形区画の併存関係について周辺の調査成果をもとに時系列的にまとめておく。弥生後期には中期段階の環濠配置と一変し内濠となる第8次SD05、第4次SD01までの連続した環濠囲郭が確立している。これらの環濠は後期初頭頃には機能していたと考えられ、後期前半以降に第8次、第12次SD02、北辺の第10次SD001・002が最縁辺までの約100mの間に環濠帯を形成する。こうした多重の環濠配置は、集落北辺が中期段階には北東～南西方向の自然河道の存在した不安定な低地土壌であったために、必然的に掘削されたと考えている。この周縁部の環濠囲郭内部に後期前半頃（大和第Ⅵ-1様式頃まで）に方形区画が成立したと思われ、後期後半（大和第Ⅵ-2・3様式）には第8次SD02、SD05の埋没が進み方形区画溝SD203や連結した区画溝SD208にも同様な土器廃棄がおこなわれている。また、その直後には第8・12次SD02の再掘削と灌漑施設の設置が進められているが、この頃には北辺の第10次SD001・002はその機能を消失している。

大和第Ⅵ-4様式～庄内式古相にはSD02も完全に埋没し、代わって第12次SD00の堰に灌漑施設の機能が推移するが布留式初頭には多量の砂で埋まってしまう。こうした周囲の状況のもとに環濠囲郭から周縁部の水路整備による領域保持が成されつつ、方形区画SD203は古墳時代前期の布留式古相まで存続して古墳中・後期にかけて完全に消滅する。以上のような推移で、平等坊・岩室遺跡の環濠集落終焉までの集落様相の変遷を追想することが可能である。

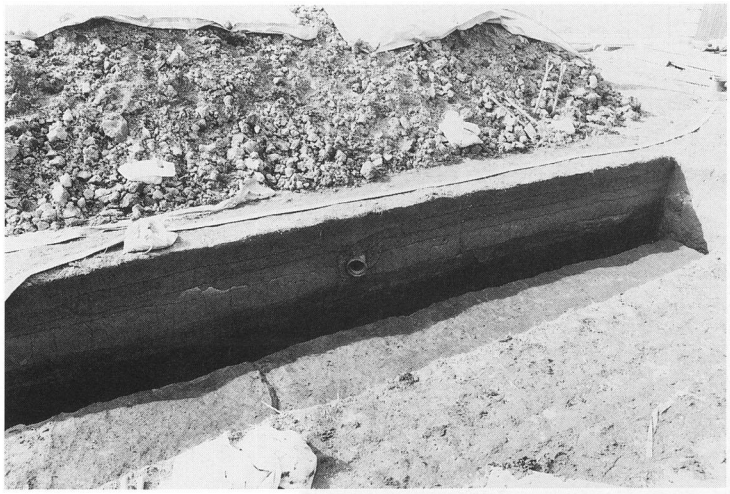
結語

以上のように現在までの調査成果からまとめたが、調査目的の主眼においた方形区画については平面規模や内部の状況についてまだまだ不明な点が多く、今後にも課題を残すかたちとなった。具体的には東側の南北一辺の位置や北方あるいは東方低地部との関係や水利施設の有無等についての問題である。現状の復元では外回りで一辺約40m弱、内郭の一辺が30mのほぼ正方形の平面形を考えているが、今後は北東あるいは南東隅のコーナー部分の確認が必要となろう。本書作成時点までの知見としては以前に想定していたように方形区画の存在と出現時期が再確認でき、南北の規模までが確定できた点を最大の成果として評価しておきたい。

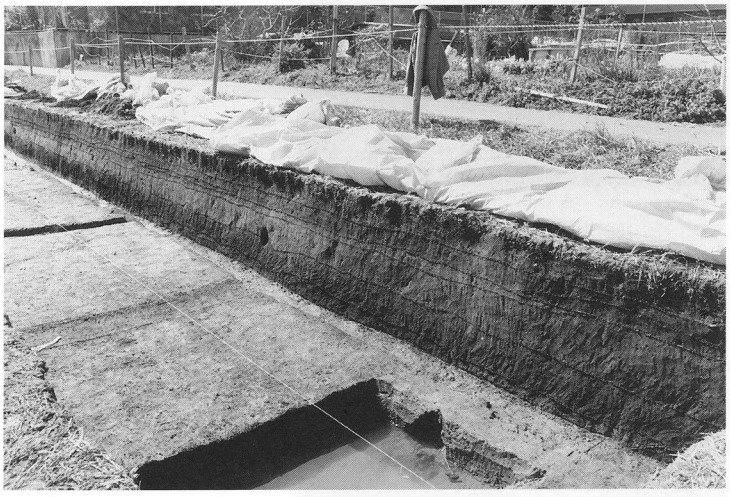
遺跡遠景（北東から）

調査区全景（上が北）

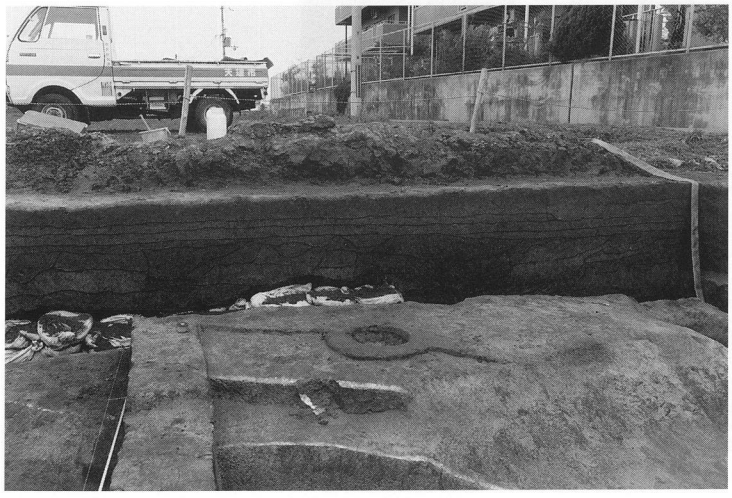
図版2　平等坊・岩室遺跡2



東トレンチ北
西壁土層断面
（東から）



西トレンチ北
西壁土層断面
（北東から）



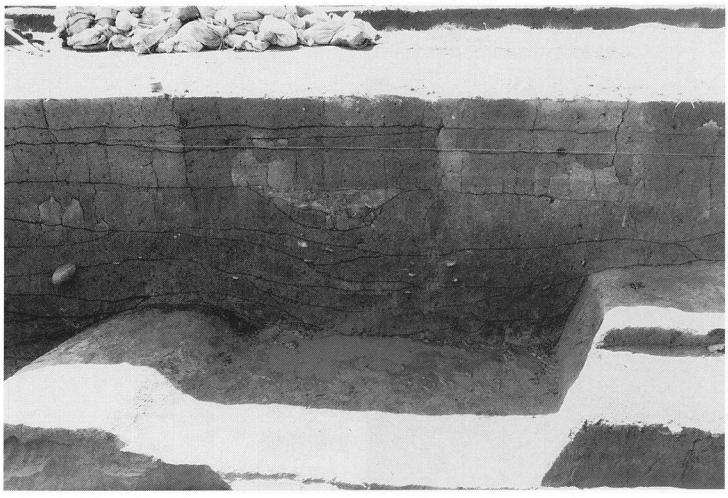
東西トレンチ連結部
南壁土層断面
（北から）

東トレンチ
溝SD-02
完掘状況
（東から）

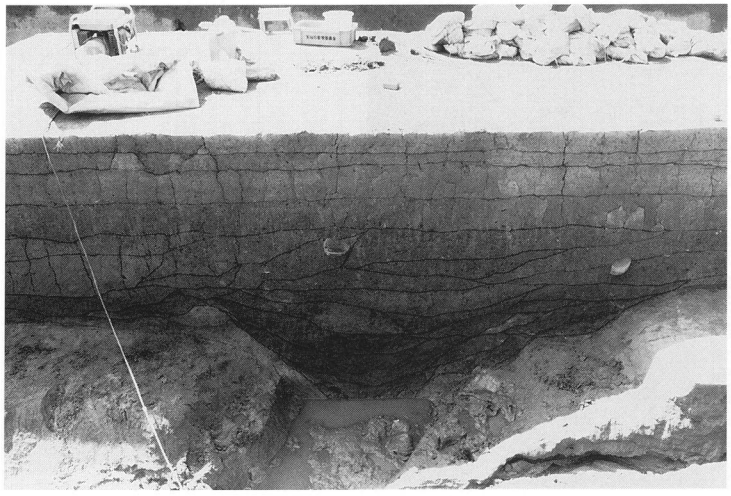
西トレンチ
溝SD-02
土層断面
（東から）

東トレンチ
落ち込みSX-02
遺物出土状況
（上が東）

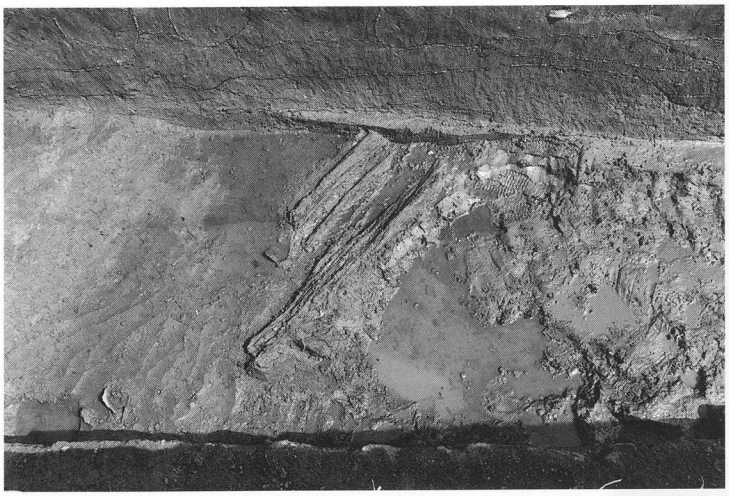
東トレンチ南
両壁土層断面
（南東から）



東トレンチ南
落ち込みSX-02
土層断面
（東から）



東トレンチ南
溝SD-04
土層断面
（東から）



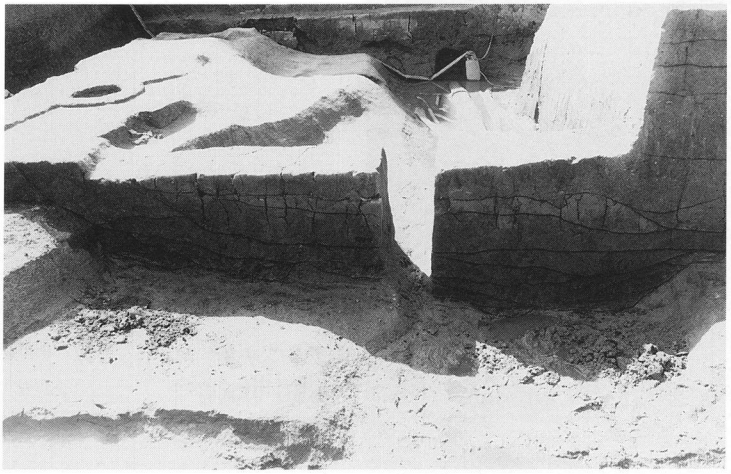
西トレンチ南
大溝SD-01北肩
遺物出土状況
（上が東）

西トレンチ南
大溝SD-01北肩
完掘状況
（西から）

西トレンチ南
大溝SD-01北肩
土層断面
（西から）

東西トレンチ連結部
完掘状況
（上が東）

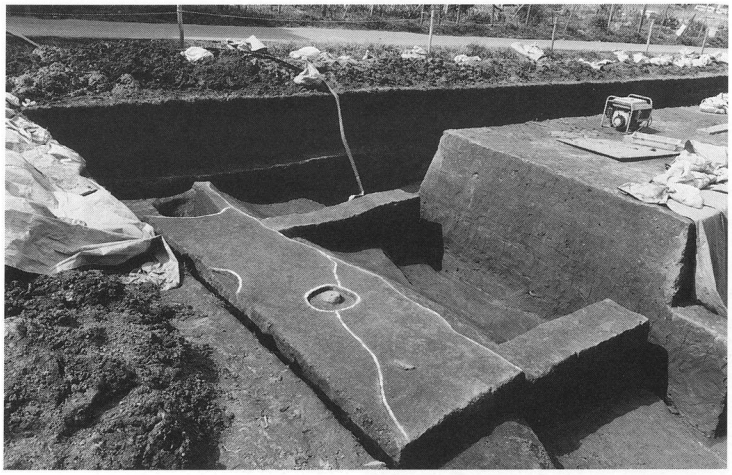
西トレンチ南溝SD-06
土層断面（西から）



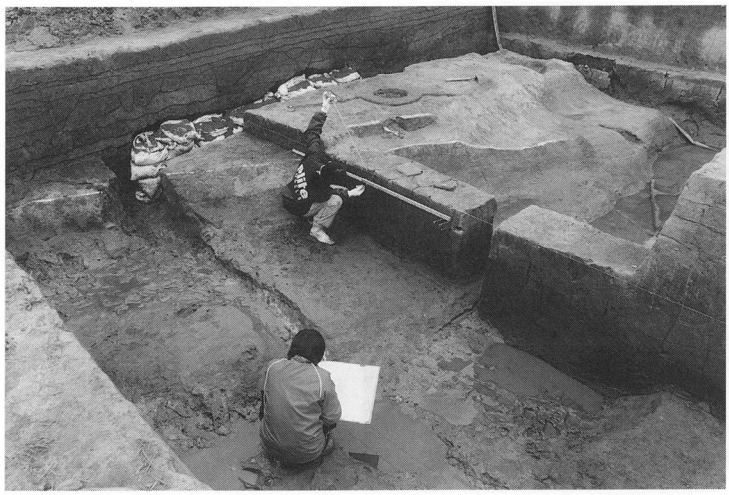
東トレンチ南
溝SD-06
土層断面
（東から）

東トレンチ中央
遺構完掘状況
（南西から）

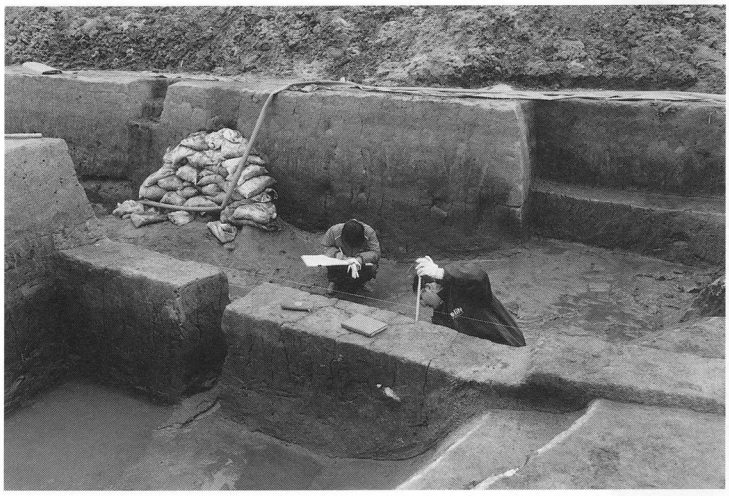
西トレンチ
遺構完掘状況
（北から）



東西トレンチ連結部
遺構完掘状況
（南東から）



調査風景 1



調査風景 2

調査風景 3

平成14年３月31日©

天理市埋蔵文化財調査概報

（平成13年度・国庫補助事業）

発　行　　天理市教育委員会
編　集　　天理市川原城町605番地

印　刷　　天　理　時　報　社
天理市稲葉町80番地